九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A study of music therapy for chronic schizophrenia patients

浅野, 雅子
九州大学大学院芸術工学府

https://doi.org/10.15017/19749

出版情報：九州大学, 2010, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

第 4 章
個人的音楽背景の違いによる
音楽療法の効果への影響

4.1　はじめに

第 3 章では対照群を設定した上で，慢性期統合失調症患者に対する無作為抽出による音楽療法の効果を報告した．これらの報告では，精神機能面や社会機能面に関して，改善に限らず改善と悪化の両者の方向に対して変化をもたらすことから音楽療法の介入効果は個人によって異なることが認められた．

音楽は対象者によって異なる心理的受容があり（Dainow, 1977 ; 谷口, 1998），個別的な要素が強いと言われている．それにもかかわらず，対象者の音楽的背景との関連は明らかにはされていない．そこで本章では，音楽療法で得られた治療効果と対象者の音楽経験や音楽の好みの程度，音楽への日常的な関心といった個人的音楽背景要因との関連について検証することを目的とする．

4.2　目的と仮説

4.2.1　目的

音楽療法で得られた治療効果と対象者の音楽経験や音楽の好みの程度，音楽への日常的な関心といった個人的音楽背景要因との関連について検証すること．

4.2.2　仮説

音楽療法により得られた治療効果は，対象者の個人的音楽背景要因と関連している．

4.3　方法

4.3.1　対象

本研究では，第 3 章における研究対象と同様である，実験群 13 名（平均年齢 57.92±9.74，男：女＝6：7）と対照群 13 名（平均年齢 56.77±10.51，男：女＝7：6）であった．実験群と対照群の全対象に対して以下の項目に関する調査を実施し，個人的音楽背景の実態を明らかにした上で，第 3 章で得られた介入前後の各種検査結果の変化量を分析対象とした．

4.3.2　実施方法

個人的音楽背景の実態調査は，第 3 章研究の介入前評価期間中である，2008 年 12 月 5 日～19 日までの 3 週間の間に行われた．筆者が調査票を作成し，半構成的面接にて調査を行った．また，この調査は音楽療法を実施するにあたっての好みの音楽聴取も兼ねていたことから，音楽療法を実施する作業療法士 2 名が施行した．

4.3.3　個人的音楽背景調査項目

調査は実験群と対照群の全対象者に実施することと，音楽背景調査を行うことで，音楽療法介入への影響が及ぶのを防ぐため，極力，音楽調査と悟られないよう，音楽に関する質問項目に限らず，作業療法や趣味活動に関する質問項目などを含め，日常生活全般における質問内容となるよう配慮した．以下に調査票の内容の詳細を記述し，後に調査票を示した（図 4.1，4.2）．

1）作業療法（Occupational Therapy; OT）の好みの程度

「OT が好きですか」という質問項目に対し，とても嫌い，嫌い，どちらでもない，好き，とても好き，という 5 段階からなり，対照的な対になる言葉を

左右に配置した Likert Scales を用いて評価を行った.

2）音楽の好みの程度

「音楽が好きですか」という質問項目に対し，とても嫌い，嫌い，どちらでもない，好き，とても好き，という 5 段階からなり，対照的な対になる言葉を左右に配置した Likert Scales を用いて評価を行った.

3）趣味の有無

趣味があるかないか，また，ある場合はその内容と特に行った時期について質問を行った．質問項目は「趣味はありますか．あれば，その内容と，特に行った時期を教えて下さい.」であった．ここでいう趣味とは，対象者が熱中したことや興味があること，よく行ったことなどを指している.

4）音楽経験の有無

音楽経験があるかないか，また，ある場合はその内容と特に行った時期について質問を行った．質問項目は,「音楽の経験はありますか．あれば，その内容と，特に行った時期を教えて下さい.」であった．ここでいう音楽経験とは．過去に合唱部などの音楽に関する部活動を行っていた，またはピアノなど音楽に関する習い事を行っていた，その他，バンドを組んでいたなどの音楽に関する能動的な経験を指している.

5）音楽環境の状況

今までの環境において，音楽的状況であったか否か，また，あった場合はその内容と特にそうであった時期について質問を行った．質問項目は,「家族の中に音楽経験がある方はいますか．いる場合，その内容と特に行った時期を教えて下さい.」であった．ここでいう音楽環境の状況とは，生育歴を含む今までの環境において，生活の中で両親がよくレコードをかけていた，兄弟が楽器を演

奏していた，自分自身が音楽にまつわる仕事をしていた，など音楽に関する受動的な環境を指している．

6）作業療法における好みの活動

「OT で行われる活動で，好みのものを教えてください（3 つまで）」と質問し，作業療法で行われる具体的な活動内容の好みを調査した．

7）音楽ジャンルの好みの状況

音楽ジャンルの好みに関し，演歌・歌謡曲・童謡・民謡・詩吟・ロック・ポップス・クラシック・ジャズ・フォーク・その他から複数選択で対象者に選択してもらった．また，これらの選択を容易とすることと，具体的な内容を調査するため，この質問のほかに，特に好きな歌手や曲，または，特に嫌いな歌手や曲に関しても同時に調査を行った．

8）音楽の日常的な関心

今現在の日常生活に関して，1. ラジカセなど（各種オーディオ機器を含む）による音楽聴取の頻度，2. テレビによる音楽番組視聴の頻度，3. ラジオによる音楽番組聴取の頻度，4. 歌唱の頻度，5. 楽器演奏の頻度，6. 自室での趣味活動の頻度，について，全くしない，少しする，よくする，とてもよくする，という 4 段階からなる Likert Scales を用いてそれぞれ評価を行った．

平成 20 年　　月　　日（　　）　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1. OT が好きですか

とても嫌い―――嫌い―――どちらでもない―――好き―――とても好き

2. 音楽が好きですか

とても嫌い―――嫌い―――どちらでもない―――好き―――とても好き

3. 趣味はありますか。あればその内容と、特に行った時期を教えて下さい。

ある・なし　ある場合、内容と特に行った時期（　　）

4. 音楽の経験はありますか。あればその内容と、特に行った時期を教えて下さい。

ある・なし　ある場合、内容と特に行った時期（　　）

5. 家族の中に音楽の経験がある方はいますか。いる場合、その内容と特に行った時期を教えて下さい。

いる・いない　いる場合、内容と特に行った時期（　　）

6. OT で行われる活動で、好みのものを教えて下さい（3 つまで）。

①　　②　　③

7. どのような音楽が好みか、教えて下さい（複数選択可）。

演歌・歌謡曲・童謡・民謡・詩吟・ロック・ポップス・クラシック・ジャズ・フォーク

その他（　　）

8. 特に好きな歌手や曲があれば教えて下さい。

（　　）

9. 特に嫌いな歌手や曲があれば教えて下さい。

（　　）

Fig.4.1　1 枚目の調査票を示す．各内容について半構成的面接を行いながら調査を実施した．

1．今現在の日常生活について教えて下さい。

① ラジカセなどで何か聴くことがあれば、その内容と回数を教えて下さい。

聴く・聴かない　　聴く場合その内容（　　）

全く聴かない――――少し聴く――――よく聴く ――――　とてもよく聴く

（0/週）　（1~3/週）　（4~6/週）　（毎日/週）

② テレビを見ることがあれば、その内容と回数を教えて下さい。

見る・見ない　　見る場合その内容（　　）

全く見ない――――少し見る――――よく見る――――とてもよく見る

（0/週）　（1~3/週）　（4~6/週）　（毎日/週）

③ ラジオを聴くことがあれば、その内容と回数を教えて下さい。

聴く・聴かない　　聴く場合その内容（　　）

全く聴かない――――少し聴く――――よく聴く――――とてもよく聴く

（0/週）　（1~3/週）　（4~6/週）　（毎日/週）

④ 歌を歌いますか

全く歌わない――――少し歌う――――よく歌う――――とてもよく歌う

（0/週）　（1~3/週）　（4~6/週）　（毎日/週）

⑤ 楽器を演奏しますか

全く演奏しない――――少し演奏する――――よく演奏する――――とてもよく演奏する

（0/週）　（1~3/週）　（4~6/週）　（毎日/週）

⑥お部屋で行っていることがあれば、その内容と回数を教えてください

ある・なし　　ある場合、その内容（　　）

全く行わない――――少し行う――――よく行う――――とてもよく行う

（0/週）　（1~3/週）　（4~6/週）　（毎日/週）

以上です。ありがとうございました。

Fig.4.2　２枚目の調査票を示す．各内容について半構成的面接を行いながら調査を実施した．

4.3.4　データ分析と解析方法

得られたデータの解析には統計解析ソフト Dr. SPSS 13.0J for Windows を使用して分析を行った．音楽療法で得られた治療効果と個人的音楽背景要因との関連を検討するため，実験群と対照群のそれぞれにおいて，音楽背景調査により得られた項目ごとに，それぞれをあり群・なし群の 2 群に分け，第 3 章で得られた各種検査項目の介入前後の変化量を，t 検定を用いて比較検定を行った．検査結果の変化量は，PANSS と REHAB においては下位項目を用いた．

音楽や治療に関する背景要因を調査することが目的であることから，すべての音楽背景調査項目の中から，音楽や治療に関する質問項目を選択し，検定対象とした．また，調査結果によっては，2 群に分けることができない項目（例えば，楽器を演奏するでは全員がしないと回答）や，極端に偏りが大きい項目（例えば，音楽の好みの程度はほとんどの方が好きと回答）などは個人の影響が大きくなってしまうことから除外対象とし，検定から除外した．

4.4　結果

実験群と対照群それぞれにおける調査結果を表 4.1, 4.2 に示す．実験群では，「作業療法の好みの程度」と「ラジカセでの音楽番組の聴取」で，対照群では，「作業療法の好みの程度」「音楽の好みの程度」「ラジカセでの音楽番組の聴取」「ラジオでの音楽番組の聴取」の項目において対象の偏りが大きく，個人の影響が大きくなってしまうことから比較検定の除外対象とした．その結果，実験群においてラジオで音楽番組を聴取する群と聴取しない群における REHAB の逸脱行動の変化量において有意な差を認め（p=0.033），歌唱を行う群と行わない群における FAB の変化量においても有意な差が認められた（p=0.032）．これらは，日常的にラジオで音楽番組を聴取する群の方が REHAB の逸脱行動が減少，すなわち改善しており，日常的に歌唱を行う群の方が FAB の点数が増加，すなわち，向上しているという結果であった（表 4.3）．

対照群においてはいずれも有意な差を認める項目はなかった（表 4.4）．

Table.4.1　実験群における個人的音楽背景調査結果

質問項目	**結果 (N=13)**					
作業療法の好みの程度	好き	**11**	どちらでもない	**2**	嫌い	**0**
音楽の好みの程度	好き	**9**	どちらでもない	**3**	嫌い	**1**
音楽経験の有無	あり	**5**	なし	**8**		
家族の音楽経験者の有無	あり	**6**	なし	**7**		
ラジカセでの音楽番組の聴取	あり	**1**	なし	**12**		
テレビでの音楽番組の視聴	あり	**6**	なし	**7**		
ラジオでの音楽番組の聴取	あり	**6**	なし	**7**		
歌唱の有無	あり	**7**	なし	**6**		

Table.4.2　対照群における個人的音楽背景調査結果

質問項目	**結果 (N=13)**					
作業療法の好みの程度*	好き	**10**	どちらでもない	**2**	嫌い	**0**
音楽の好みの程度	好き	**12**	どちらでもない	**1**	嫌い	**0**
音楽経験の有無	あり	**10**	なし	**3**		
家族の音楽経験者の有無	あり	**4**	なし	**9**		
ラジカセでの音楽番組の聴取	あり	**2**	なし	**11**		
テレビでの音楽番組の視聴	あり	**6**	なし	**7**		
ラジオでの音楽番組の聴取	あり	**1**	なし	**12**		
歌唱の有無	あり	**10**	なし	**3**		

*1名がこの質問に対し、返答できないと回答された。

Table.4.3　実験群における各音楽背景と各種検査項目の変化量の比較

実験群（N=13）	PANSS 陽性症状 Mean (SD)	PANSS 陰性症状 Mean (SD)	PANSS 総合精神病理評価 Mean (SD)	REHAB 逸脱行動 Mean (SD)	REHAB 全般的行動 Mean (SD)	FAB † Mean (SD)	TMT-A † † Mean (SD)
音楽の好みの程度						9:3	8:2
好き (N=9)	2.23(4.15)	0.67(4.15)	2.33(7.86)	0.11(1.54)	1.00(20.14)	0.89(2.21)	---
どちらでもない (N=4)	-0.25(1.71)	1.00(2.71)	2.00(9.13)	-0.25(.96)	-6.50(24.64)	0.00(1.00)	---
音楽経験の有無						4:8	3:7
あり群 (N=5)	0.80(4.66)	0.00(3.54)	-2.20(4.60)	0.60(1.95)	8.40(22.20)	-0.25(1.71)	-43.23(91.17)
なし群 (N=8)	2.00(3.25)	1.25(3.88)	5.00(8.45)	-0.38(0.74)	-7.38(18.85)	1.13(2.03)	-54.31(69.73)
家族の音楽経験者の有無						6:6	6:4
あり群 (N=6)	1.17(4.07)	0.67(3.56)	-1.00(8.05)	0.17(1.94)	0.67(27.13)	0.33(1.21)	-61.23(72.44)
なし群 (N=7)	1.86(3.67)	0.86(4.02)	5.00(7.12)	-0.14(0.69)	-3.00(15.80)	1.00(2.61)	-35.63(77.98)
テレビでの音楽番組の視聴						5:7	3:7
見る群 (N=6)	0.17(1.60)	0.50(3.56)	1.83(7.65)	-0.17(0.41)	-4.67(15.37)	-0.60(1.14)	-12.43(47.11)
見ない群 (N=7)	2.71(4.68)	1.00(4.00)	2.57(8.66)	0.14(1.86)	1.57(25.55)	1.57(1.99)	-67.51(76.65)
ラジオでの音楽番組の聴取						5:7	4:6
する群 (N=6)	1.00(4.20)	2.67(2.81)	1.83(9.79)	**-0.83(0.41)***	-10.00(19.92)	1.00(1.58)	-74.98(84.73)
しない群 (N=7)	2.00(3.51)	-0.86(3.67)	2.57(6.63)	**0.71(1.50)**	6.14(19.99)	0.43(2.30)	-35.00(64.32)
歌唱の有無						6:6	6:4
歌う群 (N=7)	1.43(3.99)	0.71(4.72)	2.29(9.07)	-0.43(0.54)	2.71(14.66)	**1.83(2.04)***	-30.33(65.30)
歌わない群 (N=6)	1.67(3.72)	0.83(2.32)	2.17(7.08)	0.50(1.87)	-6.00(27.16)	**-0.50(1.05)**	-81.98(78.18)

*p<0.05　†N=12の結果を示す　††N=10の結果を示す

PANSS:Positive and Negative Syndrome Scale

REHAB:Rehabilitation Evaluation Hall and Baker

FAB:Frontal Assessment Battery at Bedside

TMT-A:Trail Making Test-A

Table.4.4　対照群における各音楽背景と各種検査項目の変化量の比較

対照群（N=13）	PANSS 陽性症状 Mean (SD)	PANSS 陰性症状 Mean (SD)	PANSS 総合精神病理評価 Mean (SD)	REHAB 逸脱行動 Mean (SD)	REHAB 全般的行動 Mean (SD)	FAB Mean (SD)	TMT-A Mean (SD)
音楽経験の有無							
あり群 (N=10)	-0.30(2.11)	-1.30(3.56)	-1.90(4.01)	-0.40(1.08)	0.80(11.38)	-0.60(2.50)	-10.93(46.95)
なし群 (N=3)	1.33(2.31)	-1.33(2.31)	1.67(6.66)	0.00(0.00)	11.67(7.51)	1.00(2.00)	1.50(47.30)
家族の音楽経験者の有無							
あり群 (N=4)	-0.50(0.58)	-1.50(2.38)	-3.25(3.59)	0.00(0.82)	5.75(8.77)	-1.75(1.89)	-25.38(19.43)
なし群 (N=9)	0.33(2.60)	-1.22(3.67)	-0.11(4.96)	-0.44(1.01)	2.22(12.68)	0.44(2.40)	-0.37(52.21)
テレビでの音楽番組の視聴							
見る群 (N=6)	0.50(3.02)	-2.17(2.86)	-0.33(5.68)	-0.67(1.21)	3.83(12.50)	-0.83(2.32)	1.43(45.81)
見ない群 (N=7)	-0.29(1.25)	-0.57(3.55)	-1.71(3.99)	0.00(0.58)	2.86(11.31)	0.29(2.56)	-16.20(46.85)
歌唱の有無							
歌う群 (N=10)	0.10(2.51)	-1.20(3.46)	-0.20(4.69)	-0.50(0.97)	1.60(12.41)	-0.10(2.69)	-6.31(48.15)
歌わない群 (N=3)	0.00(0.00)	-1.67(2.89)	-4.00(4.00)	0.33(0.58)	9.00(4.36)	-0.67(1.53)	-13.90(42.84)

PANSS:Positive and Negative Syndrome Scale
REHAB:Rehabilitation Evaluation Hall and Baker
FAB:Frontal Assessment Battery at Bedside
TMT-A:Trail Making Test-A

4.5　考察

個人的音楽背景別による効果の違いを検証することを目的に，実験群と対照群それぞれにおいて，音楽背景調査を行った上で，第 3 章で得られた音楽療法介入前後の各種検査結果の変化量を分析対象として比較検定を行った．その結果，音楽療法を介入した実験群において，日常的にラジオで音楽番組を聴取する群の方が REHAB の逸脱行動が改善し，日常的に歌唱を行う群の方が，FAB が向上するという結果が示された．対照群においては有意な変化を認める項目は得られなかった．

ラジオでの音楽番組の聴取と REHAB の逸脱行動の関連について，慢性期統合失調症患者の方々は普段の病棟生活において，自室にこもっていたり，臥床傾向にある方が少なくない．このような傾向がみられる対象の中で，ラジオで音楽番組を聴取している方々は，自室でも活動をされていると捉えられる．このような方々に音楽療法を介入することで普段の日常生活と音楽療法場面のつながりが形成され，音楽療法での体験が日常生活に対して波及効果を生み，逸脱行動の改善につながったと考えられた．この分析では，音楽を聴いていればラジオに限らず，ラジカセなどやテレビ番組でも効果が得られるように思われる．しかし，ラジカセでは CD やカセットテープなどが必要となるためこれらを持っていないと音楽を聴くことが出来ない．また，持っていても古いものであれば，聴かなくなってしまうことが予測される．さらに，テレビにおいては病棟のデイルームに 1 台が設置され，他の入院患者と共用であることから，自分が見たい時に見たい内容のものが見られない可能性があった．その点ラジオは，CD やカセットテープがなくても随時音楽が流れ，また，個人で所有していることから自分が聴きたい時に聴きたい内容の番組を聴取することができる．このように，入院生活のような制限がある中において，ラジオは比較的自由に対象者の状態に合わせて音楽を聴取出来る．このことが，今回の結果につながったと考えられた．

日常的な歌唱の有無と FAB の向上については，第 3 章で考察したように一連の言語を媒介とした音楽療法が言語的な刺激となり，一部の認知機能の改善を示したと考えられた．普段から歌唱を自発的に行っている方々は，言葉に対して親和性が高いことが考えられる．よって，これら言語課題が含まれる FAB の改善につながったと考えられた．しかし，今回得られたのは FAB 全体との関連であった．この点については今後も統合失調症患者における音楽と認知機能の

関係について検討を重ねていく必要があると考えられた.

最後に音楽経験の有無に関して，今回の結果からは有意な差は認められなかった．音楽経験に関しては，大谷ら（1998）の精神分裂病の患者で病前に楽器経験がある場合，リズム性などの障害が比較的保たれているとの報告がある．しかし，この音楽経験と音楽療法の効果は直接結びつくかどうかは疑問である．筆者は臨床経験の中で，音楽学部卒や元音楽教員など，いわゆる音楽経験が高いといわれる患者たちとともに音楽療法を行ってきた．これらの音楽経験が高い患者たちは，求める音楽の内容が高く，他患者と共に行う音楽療法へは一線を画して参加されていた．そのため，院内で行われる音楽療法では治療効果が得られ難いと感じていた．音楽経験に関する報告の中で，Vanderark と Ely（1993）は音楽経験がある場合に楽曲を分析的・批判的に聴取するため，非経験者に比べて自律神経緊張が高まると報告している．そのほか，西村ら（2003）はコンサート形式で音楽聴取を行った結果，音楽的教育経験がない場合に，唾液中コルチゾール値とクロモグラニン A 値の低下がより大きいとし，音楽経験があることによる影響を報告した．一方で，同じく西村ら（2007）は受動的音楽療法と能動的音楽療法における音楽経験の有無の効果検証をした結果，心理的，身体的ストレス指標ともに差はみられなかったとしている．これらの報告はいずれも大学生や一般市民を対象にしていることから，今回の統合失調症患者を対象とした調査と同様のものとして考えることは難しい．しかし，臨床において，対象者に音楽経験があることによって安易に音楽を用いた活動が導入されることがある．そのため，音楽経験と音楽療法の効果の関係を示していくことは対象者により良い治療を提供していくために必要な情報となる．よって，今後も他領域における報告も参照にしながら検討を続けていく必要がある．

以上より，音楽療法により得られた治療効果は対象者の個人的音楽背景要因と関連することが示された．このことからは，音楽療法を介入する際，対象者の音楽背景を踏まえた上で音楽療法の介入を行っていく必要性があることがいえた．

4.6　まとめ

個人的音楽背景別による音楽療法の効果の違いを検証することを目的に，実

験群と対照群それぞれにおいて，第 3 章で得られた音楽療法介入前後の各種検査結果の変化量を分析対象として比較検定を行った．その結果，音楽療法を介入した実験群において，日常的にラジオで音楽番組を聴取する方の REHAB の逸脱行動が改善し，日常的に歌唱を行う方は FAB が向上するという結果が示された．よって，音楽療法により得られる治療効果は対象者の個人的音楽背景要因と関連することが示された．このことから，音楽療法を介入する際，対象者の音楽背景を踏まえた上で介入を行っていくことが重要であることがいえた．